
短編＋夢想

キサラギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編十夢想

【Nコード】

N2718K

【作者名】

キサラギ

【あらすじ】

今回は短編集。

故に粗筋は無いし、更新も不定期なり！！

…なんだろ、この投げやり感は。

恋姫のバレンタイン？（前書き）

詠と月がバレンタインをやったら、こんな感じかと思って書いたの
さ…

今回は短編集です。

感想お待ちしております。

…もし要望があったら、感想板にでも書いてください。
できる限り答えます。

恋姫のバレンタイン？

「…ふう…これで良し、っと。」

先程まで山のように積んであった書簡を片付け、俺は、ぐっと背伸びをする。

「うわぁ、もうこんな時間かよ…」

昼間くらいに始めたのに、気づけばもう真夜中だった。こりゃ、早く寝ないとだ。そう思い寝台に横になった時…
コンコン。

「ん？こんな時間に、誰だろ？」

そう思い、ドアを開ける。

「あ…夜分遅くにすみません、ご主人様。」

「……っ…。」

そこに居たのは、月と詠だった…のだが。

「それは構わないけど…どうしたんだ、二人とも？」

二人…というか詠の様子がおかしい。

なんだか、妙にソワソワして時折目が合うと慌てて逸らす。…俺何かしたかなぁ。

そんな風に一人悩んでいると、

「あ、あのう…」

「…ん？」

っと、何やら月が可愛らしい小包を差し出してきた。

「…これを俺に？」

そう、俺が聞くと、

「…（コクコク）！」

と、首が外れるんじゃないかと思う位激しく頷いた。

「ありがとう。でも、なんでまた？」

そう月に問い掛けると、今まで会話に入って来なかった詠が、ボソツと呟いた。

「…いん」

「ん？」

なんだろう？よく聞き取れなかった。

「ごめん、詠。今、なんて言ったの？」

すると詠は、少し顔を紅くして、

「だからあ、今日はアンタの世界で、『ばれんたいん』とかいう日なんでしょっ？だからよっ！文句あるっ！？」

…………へ？

「バレンタイン？」

「そ、そうよ。バレンタインっ！！」

そういいながら、詠も小包を差し出してきた。

「べ、別にあんたの為じゃ無いんだから！ただ、ちょっとした気分転換…そう、気分転換なだけ何だk…ひゃう?!」

「へう…」

二人は素っ頓狂な声をあげてた。

俺が急に抱きしめたからだ。

「…ありがとう、二人とも。すごく、嬉しいよ。」

そう言いながら、抱きしめる力を強くする。

「へう…／＼／＼／」

「…ばか／＼／」

ああ、ヤバイ。なんかもう、まともな理性が疲れて霧散してる。

「…なあ、二人とも。」

「…な、なによ？」

「はい？」

俺は満面の笑顔で、

「…今日は、三人で寝ないか？」

「…はい。／＼／＼／」

「…ふんっ…／＼／」

そういつてそれぞれと唇を重ね、肌を重ね合った。

（翌朝）

「ご主人様！貴方という方は、いくらなんでも節操が無さ過ぎます！！もう少し節度というものを……！」

「す、すみません……」

三人で一緒に寝てたところを起こしに来てくれた愛紗に見つかり俺だけ怒られたのは内緒だ。

終わり♪

恋姫のバレンタイン？（後書き）

反省はしてる。

だが、後悔はしてない。

ある種の自業自得 呉√Ver (前書き)

今回は呉国です。

メンバーは、一刀、蓮華、思春、明命、亞莎の五人です。(キャラ崩注意)

こんな日もあるんじゃないかな、的な自己満足。
楽しんでいただけましたら幸いです。

ある種の自業自得 呉√ver

「……………」

朝、目を開けて俺は言葉を失った。

というよりは、言葉を発する事が出来なかった。何故か？

亞莎が。あの、おとなしい亞莎が…自分の唇を俺の唇に重ねていた。…念のために言っておくが、昨日の晩は誰とも閨を共にしてはいない。嘘じゃない。

「ちゅ…くちゅ…れろ…んちゅ…」

亞莎：愛おしく口づけをしてくれるのは嬉しいのだが流石に、そろそろ起きないとだ。

「んちゅ…あ、亞莎？」

「くちゅ…れろ…んむ…ふえ？」

話し掛けて、亞莎と少し見つめ合い…

「……………ッ!？」

あ、真っ赤になった。

「か、かか一刀様!お、起きていらっしゃったのですか?!」

「ん?いや、今起きたとこ。」

ホントはもう少し早く起きてたけどね。

「そ、そうでしたか。」

ホッと一安心する亞莎。そんな亞莎を可愛いなと思いながら、今朝の感想を口にする。

「…それにしても。」

「…?なんですか？」

「いやあ、まさか亞莎がこんな朝から誘惑してくるとは…」

「え…ふええ!?! い、いえ、あの、そのっ!?!」

必死に弁明しようとする亞莎。…ちよっと『いじわる』するか。

そう思った俺は、今なお慌てている亞莎の右頬を優しく撫でるように触りながら、言った。

「ねえ、亞莎？続き、する？」

「ふえ…続き、ですか？」

最初はなんの事かわかってない亞莎だったが、徐々に顔が朱くなり…

「……………ッ?! し、失礼しましたゝ!!」

あっ、逃げた。

ていうか…なんか嵐の様に走り去っていったな。しかも亞莎ったら遠くの方で、

「は、恥ずかし過ぎますゝ!？」

とか叫んでました。

まあとにかく、せっかくの休日なんだしもう少し眠っても問題無いだろ。

そう思い、寝台に横になろうとした時だった。

「……………」

扉の向こうから気配を感じる。

(…暗殺者か!?)

だとすると、戦わなくてはならない。

俺は、そっと枕元に置いてある短剣を手にとる。…だが

コン、コン

(…ノック?)

一気に緊張が抜けながらも、扉の方へ声をかける。

「はい？」

「……………」

無反応かよ。

仕方ないので扉を開ける。

その先には…

「……………あれ？」

…誰も居なかった。

「気のせいじゃ……………ないよなあ…」

「当然だ。」

「だよなあ…って、思春?!」

「…どうかしたのか？」

「い、いやなんでもないよ。それよりどうしたんだ、こんな朝早く。」

「…どうした、だと？」

あれ？思春の周りに殺気めいた物が…

「貴様あああ！！」

「ひい！」

やばい！思春がまだ武器を所持してないとはいえ、このままではマジで殺られる！？

「お、落ち着けて思春！一体何があったんだよ！？」

「黙れ！貴様が原因だろうが！！」

なに！？俺が原因だと！？だが、心当りなんて全く……………あ。

「…蓮華達との約束？」

「やっと思い出したか！」

しまった、そういや今日は久々に休暇が取れたから蓮華、思春、明命、亞莎、俺の五人で街に行く約束してたんだった。

「ごめん！すぐに支度するからもう少し待ってて！」

「…わかった。蓮華様達には私から伝えておく。」

「ありがとう。助かるよ。」

「別に良い。それより、亞莎を見なかったか？私より先にお前の部屋に向かわせたのだから。」

「…へ？！い、いや見てないよ？」

「…嘘だな。」

俺の態度を不審に思ったのか、思春がにじり寄って来る。

…うん、いくら不審に思ったからって、『鈴音』を構えるのはおかしいと思うんだ、俺。

「あ、いや嘘じゃ無いんだけど…」

「けど、何なんだ？」

「えっと、だな…つまり、その…」

「：答えられないような事なのか？」

当たってます！刃が喉元に当たってます！！

ガチャ：

ん？

「：思春、もう良い。」

「蓮華（様）！！」

よかった。蓮華が来れば思春も無闇に暴れたりはしないだろう。

それに、明命に亞莎もいる。

「ごめん蓮華。すぐに支度を——」その必要は無いわ！——：へ？」

何故だろう？蓮華は笑ってるのに体からどす黒いオーラが：あと、心なしか思春が震えてる気が：

「見損ないましたよ一刀様：」

明命は呆れ果てているし

「~~~~ッ／／／」

亞莎に至っては目が合う度に顔を真っ赤に：

っと、ここで今朝の亞莎との事を思い出した。

「蓮華さん？まさかと思いましたが：ご存知で？」

「ええ。まさか私達との約束に遅刻するだけでなく早朝から亞莎に手を出すなんて：」

「いや、俺から手を出した訳j——」問答無用！——ひい！？」

は、般若だ！蓮華の後ろに般若が見える！？

どうする？俺！

1. 戦う（説得する）

2. 召喚（思春か亞莎に助けてもらおう）

3. 逃げる（読んで字の如く）

…3だな。よしつ、そうと決まれば今すぐ実行に《ガシイイ！！》
《…ん？》

な、なんだ？ 何かに捕まれて身動きが…！

「逃がしませんよ、一刀さま？」

み、明命！？ そんな、いつの間に…！

そんな事を考えてたのが悪かったんだな…気づけば蓮華が目の前…
そりゃもうすぐ近くに居た。

「ウフフ…さあ、一刀？ 今から、楽しい…楽しい、お喋りの時間
よ。」

「あ、あはは…」

…今朝、亞莎にいじわるした報いかなく、とか思いながら、なるべ
く痛くありませんようにと必死に神様に願ってみた。

…結論。この世に神様なんてものは居なかったようだ。

終われ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2718k/>

短編†夢想

2010年10月17日02時53分発行